

生涯学習の生態学

—成人学習の個別化状況を探る—

倉内史郎 鈴木眞理
西村美東士 藤岡英雄

野間教育研究所紀要

第 37 集

財団法人 野間教育研究所

野間教育研究所紀要 第37集

生涯学習の生態学

—成人学習の個別化状況を探る—

倉内史郎 鈴木眞理

西村美東士 藤岡英雄

まえがき

生涯学習という言葉はかなり一般的になっている。リカレント教育とかリフレッシュ学習という言い方も、さほど抵抗なく用いられるようになってきたといってよい。これからの日本の教育改革は生涯学習体系への移行を柱とするという政策提言もされている。

当然、生涯学習をめぐる論議が盛んである。“生涯学習”をタイトルに含む本が数多く刊行され、教育研究の分野では生涯学習に関する発表や討論が活発に行われている。

だがそれらの論議なり報告なりには、生涯学習に関して、かくあるべしの「理念」論、政策としての「制度」論、あるいは政策批判としての「運動」論は少なくないが、成人学習者の実態に即した研究はまだ乏しいというのが事実であろう。

実際に学んでいる成人たちは、どんな動機から、どんな方法で、何を学習しているのか。そしてその学習場面についてどのような評価なり、希望なり、今後の計画をもっているのだろうか。そこにはまた、個々の学んでいる成人のものの考え方や生き方が、どのように反映されているのであろうか。

ここに報告するわれわれの調査は、さまざまな生活的背景をもつ各年齢層の成人男女について、それらの人びとの学習方法の多様さに着目しながら、学習場面の実情をできるだけ具体的に把握しようとしたものである。

調査の設計は、野間教育研究所の社会教育研究グループを構成する倉内史郎（東洋大学教授）、鈴木真理（東京大学助教授）、西村美東士（国立教育会館社会教育研修所専門職員〈当時〉）、藤岡英雄（NHK放送文化調査研究所主任研究員〈当時〉）によってなされた。グループの研究は1986年11月から開始されたが、2年ちかくの準備期間を経て、調査の実施時期は88年9～10月の間であった。

調査に応じてくださった方々は、東京とその近県に在住の22～75歳の年齢層にわたる男性12名、女性20名の合計32名で、その職業は会社員、公務員、自営業、教員、大学職員、薬剤師、看護婦、保母、パート従事者、主婦、無職等の多種類に及んでいる。

調査方法は、あらかじめ質問事項を送付しておいて、調査員が訪問インタビューするという方式をとった。

インタビューの結果は、この報告書の第Ⅱ部に収録されているが、学習動機、学習形態、学習内容、これまでの学習経験など、いずれの側面においてもきわめて多様で、まさに社会人の生涯学習の個別化状況をそのままあらわしている。

インタビューに応じて熱心に語られた言葉から、われわれはめいめいの学習者自身の生き方の探究の姿をみる思いがした。生涯学習とは、学ぶ人それぞれにとっての人生の探究の側面にほかならないといえるであろう。それゆえにまた、人の生き方がさまざまであるように、生涯学習もまた人さまざまであって当然だといえよう。

社会教育研究の観点からは、個人の学習経歴をそれぞれの生活の状況と重ね合わせて把握るとともに、ある程度まで個々の成人学習者のタイプを類型化して描き出すための資料となればと考えている。その意味で今回の報告は、インタビューで得られた多彩で豊富な事例をできるだけ生(なま)の言葉で再現し、「生涯学習の生態学」としての資料的価値に重点を置いている。

われわれの研究をこのような形にまとめることができたのは、ひとえにインタビューに応じられた学習者の方々のご好意とご理解によるものである。生涯学習の研究は、学習する人びとと研究者との相互協力によってはじめて可能である。研究結果の報告に当たって第一に感謝とお礼を申しのべさせていただきたい。

報告書の刊行については、野間教育研究所山本康雄所長の多大のご尽力と浜田陽太郎理事(前)をはじめとする理事の諸先生のご支持を賜わり、刊行の庶務に関しては渋谷裕久事務局長のお世話になった。記してわれわれの心からの謝意を表したい。また2年余にわたる研究を通じてお骨折りくださった社会教育研究グループ担当の助手小林千賀子さんにあらためてお礼を申し上げたい。

1992年12月

研究グループ代表 倉内 史郎

目次

まえがき	i
------	---

I 成人の学習に関するインタビュー結果の報告に当たって	2
-----------------------------	---

1 この研究のねらいと報告について（倉内史郎）	2
2 調査の方法と実施（藤岡英雄）	8
3 留置調査の結果にみられる特徴（鈴木真理）	14
4 学習内容・方法の特徴的な事例（西村美東士）	19

II 成人の学習に関するインタビュー報告	26
----------------------	----

1 石田 浩一さん	男・50歳・自動車メーカー人事部管理職	29
2 増川 知代さん	女・41歳・大学病院看護婦	37
3 島村 恵子さん	女・40歳・福祉施設指導員	52
4 小原ひろみさん	女・41歳・主婦（元教員）	76
5 中島 明美さん	女・22歳・県庁職員	91
6 武藤ます美さん	女・26歳・木材輸入会社社員	100
7 関本 章さん	男・37歳・地方公務員	117
8 大野 和子さん	女・58歳・主婦（中華料理店手伝い）	136
9 高柳 瑞枝さん	女・46歳・薬剤師	142
10 小島 清子さん	女・41歳・住宅設計会社社員	153
11 大鹿 悠子さん	女・39歳・主婦	160
12 富岡沙記子さん	女・55歳・主婦	170
13 小田 絹子さん	女・56歳・主婦	193
14 藤木 孝子さん	女・36歳・保母	214
15 浅川 敏子さん	女・39歳・主婦	239

16	橋本 光子さん	女・44歳・主婦	247
17	佐原 直子さん	女・26歳・中学校非常勤講師	257
18	川村 信吉さん	男・38歳・印刷業自営	263
19	横井 照子さん	女・45歳・主婦（会計事務所自営手伝い）	...	274
20	平坪 昌男さん	男・28歳・土木建設業自営	286
21	鈴木 玲子さん	女・24歳・地方公務員（ケースワーカー）	292
22	浜川 嘉雄さん	男・68歳・無職（元自動車販売会社勤務）	...	302
23	成田 俊子さん	女・54歳・主婦	313
24	山田 吉晴さん	男・64歳・保育園経営	325
25	長内みち子さん	女・56歳・主婦（非常勤の調停員）	332
26	亀井 謙三さん	男・72歳・無職（元日銀勤務）	340
27	藤田 操さん	男・70歳・無職（元鉱山会社勤務）	347
28	高橋 直人さん	男・35歳・不動産会社社員	354
29	浅田 博史さん	男・57歳・金属塗装会社社員	361
30	坂井 蔵重さん	男・75歳・会計事務所経営	370
31	杉村 伴子さん	女・60歳・主婦（元教員）	381
32	若林 利生さん	男・46歳・大学図書館職員	411

〔付属資料〕

面接調査票	430
留置調査票	438

（中扉写真は徳島大学大学開放実践センターの提供による）

I 成人の学習に関するインタビュー結果の報告に当たって



4 学習内容・方法の特徴的な事例

学習の目標、成果、態度などの高度化

さまざまな面で学習の「質」が高度になっている。

(1) 新しいタイプの「知識人」による高度な教養（カルチャー）志向がみられる。高学歴の高齢者の◎亀井謙三さんや◎藤田操さんもその代表的な例である。亀井さんは「公民館には勉強する意欲のない年配者が集まっていて、碁か将棋でも、という雰囲気だが、カルチャーはお金がかかるが勉強したい人だけが来ている」といい、藤田さんは「社会教育施設はお年寄りだけが集まっていてつまらない。それに対してゲーテ・インスティトゥートの勉強には現役の学生も来ている」という。

(2) 知的生産や文化的創造への欲求がみられる。◎浜川嘉雄さんは「書く」ということに生きがいをもち続けて自費出版などによる数多くの知的アウトプットをしている。◎坂井蔵重さんは自分史のほか、芸術分野を中心に多面的な創作活動をしている。

(3) 脱サラ・転職者の人たちの主体性の強さがみられる。会社勤めから無認可保育園経営に変わった◎山田吉晴さんはセミ・プロ級の古書集めに基づいた歴史学習をしている。3回の転職を経験している◎高橋直人さんは「あとで後悔しないように現在を思いっきりすぞすという姿勢です」といって高いレベルの英語会話をめざしている。組織にあまり依存しないで生きていく人たちの中に、主体的な学習態度がみられるのである。

メディアの有効活用とメディアからの自立

メディアの高度な発達の中で、学習者側のたくましい主体性が育ちつつある。

- (1) 放送メディアの積極的な利用がみられる。放送大学や外国語会話の番組などの利用のほか、ラジオの気象情報（◎山田吉晴さん）なども重要なのである。
- (2) その一方で、活字メディアへの根強い信頼がみられる。◎石田浩一さんは「集まってやるよりマイペースのほうがよい。講習会に行っても話の中身は限られてしまう。やはり本を読むのが一番効率的」という。
- (3) 体験的学習の重視がみられる。◎島村恵子さんは「私は言葉だけっていうのはダメです。体験学習が合っている。体が覚えてくれることが、一番分かった

ことなんです」といい、実際に、はた織り、心理療法、気功、陶芸などを学習している。それを、理論的思考に対する無力感としてとらえることもできるが、メディアに依存しないで自らが確かめようとする主体性をそこから見いだすこともできるのである。

余暇利用自体の質的な高度化

余暇時間が増大するなかで、余暇行動が量的に増えているだけではなく、生涯学習の要素が取り入れられることによって余暇行動そのものが変化している。

- (1) 多面的学習による成長がみられる。◎高柳瑞枝さんは時間的余裕を生かして教養・社会・音楽・スポーツにわたる多面的な学習を行っているが、「生きがいは、つねに学んでいるということ、何か少しは他人様の役に立つということ」といっているように、さまざまな学習の中で、余暇利用をたんなる自己満足に終わらせない意思を自ら育てている。
- (2) 気ままだが建設的な余暇の利用がみられる。◎中島明美さんや◎武藤ます美さんや◎藤木孝子さんは、核になる学習課題が明確ではないままにさまざまな学習行動をしている。海外旅行をたびたび行うなど生活をフルにエンジョイしている女性たちである。しかし、自らは、その余暇活動的な学習の中で、国際性について深く考えたり、自分の仕事についての先取的な学習をしたりしているのである。
- (3) 趣味追求における厳しい姿勢がみられる。専業主婦の◎小田絹子さんは「緊張してカリカリのほうがよく覚えます。テストもあったほうが勉強します。ある程度厳しいほうがいいですね」という。

女性の生涯学習のインパクト

生涯学習の世界においても、女性の進出はめざましい。そこには、男社会が作り出してきた学習論とはニュアンスの違う学習論があるようだ。

- (1) 「さわやか主婦」とでもいうべき新しい学習者層の台頭がみられる。◎長内みち子さんは、大企業役員の子、エリートサラリーマンの息子という恵まれた家庭環境のもとで、多方面の活動や学習に軽やかに参加しているが、「結局は、いいかっこしいの自分を求めているのかもしれませんが。自分が嬉しいからこそ他人を助けようとするんでしょうから」といいながら、英語による婦人問題研

究会のほか、ボランティア活動や市民活動にも目を向けている。

- (2) 高学歴主婦の過去の専門性の新たな社会的還元がみられる。◎大鹿悠子さんは、大学時代に専攻した生物学の知識を生かして、自然科学系の博物館でのボランティア活動や自然保護の活動を行っている。そこには、生物関係の図書の編集の仕事から引退したあとに、自分の専門性を仕事とは違った形で社会に還元しようとする明確で積極的な姿勢がみられる。

自分自身のころへの関心

モノからココロへの関心の移り変わりは、端的な事例としては、自分のころと直接向かい合う学習への関心の集中となって表れている。

- (1) 自己の内面の成長の重視がみられる。◎佐原直子さんは「うわべだけでない内面からもにじみ出てくるものがある、そんな本当の美しさをもった女性になりたい」といって、カルチャーセンターに通っている。
- (2) 自分の生き方を追求するための学習がみられる。◎橋本光子さんは娘の登校拒否をきっかけとして、自分の生き方への問い直しのための、子育て、夫婦関係、老い、などの学習へと発展させている。仏道についても「結局自分の哲学です」といっている。
- (3) 精神改造の欲求がみられる。◎増川知代さんは「看護婦は人間学をしなくてはならない」といって、精神修養や自己啓発のセミナー、カウンセラーの研修など、精神世界に強く傾斜した生き方をしている。

自分と社会の新しい関係

新しい形態の学習は、組織や社会の中での個人の位置づけを大きく変えつつある。

- (1) 学習と社会的活動との結合がみられる。◎平坪昌男さんは青年の家の手話の学習から、障害者行政の問題や社会的矛盾に関する学習へと、関心を広げている。◎大野和子さんは婦人学習グループ連絡会での活動の中で、自らも励まし合いながら学習することによって仲間づくりを進めているが、それがそのまま社会参加活動になっている。◎横井照子さんは核・原発などの環境問題に関する精力的な集団学習を行っているが、「生活の中に起こった疑問に対して、地域活動しているんです。疑問があって、学習があって、活動するという形です」といっている。

- (2) 仕事とヒューマンイズムの結合がみられる。◎小島清子さんは高齢者向け住宅に関する自分の仕事に意欲的に取り組みながら、広い視点から高齢化社会や老人福祉等の学習を行っている。そこには、現在の仕事の内容に直接役立つよりも、自らのヒューマンイズムを深め検証することによって、むしろ逆に仕事の内容自体を改革しようとする新しい職能教育（学習）の可能性が認められる。
- (3) 情報を発信するネットワーカー型の学習がみられる。パソコン通信愛好者の◎関本章さんはその双方向性をとおしてコミュニケーション型の学習を行っている。◎川村信吉さんはミニコミ誌づくりの豊富な経験を生かして情報やメッセージの発信を中心にした活動を行っている。◎若林利生さんは大学図書館職員という職業柄、活字メディア志向の学習を進めながら、各種の勉強会にも参加しているが、そこでの彼のモットーは情報の「ギブ・アンド・テイク」ないしは「ギブ・アンド・ギブ」である。

集団学習の新たな展開

集団学習は社会教育の蓄積の大きな要素であるが、それが新しい形で生まれ変わりがながら継承、発展する可能性を認めることができる。

- (1) 従来の共同学習の特徴を生かした学習がみられる。◎小原ひろみさんは公民館の講座、自主サークル、PTA活動などとおして教育や地域社会について積極的に学習しているが、「他人と助け合わなければ生きていけないという地域の大事さ」を強調する。◎富岡沙記子さんは「地域に何かの形で還元できることがあると、すごく生きがいを感じる」という。自らの子育ての課題をきっかけとして、保育、文庫、親子映画などの活動を展開している◎浅川敏子さんは「何かして役に立っているという実感がすばらしいと思うし、最終的にはそれが自分のためになっている」という。人権、婦人、環境等、地域や社会の問題に深い関心をもち、共同学習中心の活動を進めている◎成田俊子さんも、「趣味なんかだけだと生きがいとしていまひとつ弱い。もっと能動的、社会的に参加しているのが生きがい」という。
- (2) 社会教育行政の事業への参加による学習者の主体性の獲得がみられる。◎鈴木玲子さんの学習は社会教育行政の青年対象の事業への参加などの集団学習が中心であるが、そこで社会教育職員とのつながりをもちながら、企画プログラムづくりにも参加して主体的な学習へと発展させている。

- (3) その一方で、社会教育行政から自立した新しい集団学習がみられる。◎浅田博史さんはサラリーマンの会社人間化に抵抗し、異質な人との出会いを求めてサラリーマンの勉強会を組織しているが、「社会教育の職員は、あまり本気でやっていないでしょう。ありきたりの企画を組み、参加者を集めることに熱中し、いわゆる名士をありがたがってばかりいる、という感じです。ほくは社会教育には期待していません」という。
- (4) 集団への帰属感よりも人間関係を重視する集団学習がみられる。◎杉村伴子さんは「私は人間に興味をもっているものですから、自分だけが孤立して自分だけの勉強をすればよい、という学習には興味がなかった」「集団学習によって個人学習では得られない人間と人間とのつながりができた」という。他の学習者においても、特定の学習集団だけに帰属するのではなく、数多くの集団に自由に参加して個性的なつき合いや相互学習を求める傾向が強い。
- (5) 柔軟かいシステムの集団学習がみられる。◎川村信吉さんには軸になる特定の学習テーマがあるわけではないが、人との出会いを通じて刺激を求め、自らを深めようとする姿勢がある。学習の場も、飲み屋で行われる場合もあり、柔軟である。◎関本章さんはパソコン通信の中で縦横無尽に他者との議論を展開しており、そのテーマはジグザグに変化している。両者とも、メンバーが適宜、参加・撤退し、集団の維持・存続にはこだわらず、派生したいろいろなプロジェクトが生成・消滅を繰り返すという柔軟性をもっている。

以上、それぞれの学習者の学習内容・方法の特徴を簡単に紹介したが、相互の特徴が矛盾する場合もあった。そのもっとも大きな原因は、学習者の学習に個性があるからであると考えられる。実際には、ひとりの学習者、ひとつの学習行動に、個別の発展過程があるのだろう。また、逆に、今回の被調査者の多くに共通する特徴もあったが、その場合も、ここではいくつかの象徴的な事例やトピックを拾って紹介するだけにとどめたことをのべておきたい。

(西村美東士)

II 成人の学習に関するインタビュー報告



II 成人の学習に関するインタビュー報告

調査設計・面接調査（インタビュー）担当

倉内 史郎（野間教育研究所所員、東洋大学教授）

鈴木 眞理（同上兼任所員、東京大学助教授）

西村美東士（同上兼任所員、国立教育会館社会教育研修所専門職員）

藤岡 英雄（同上兼任所員、NHK放送文化調査研究所主任研究員）

——（ ）内は調査時の所属・職名——

面接調査（インタビュー）担当

小林千賀子（野間教育研究所助手）

伊東 直子（野間教育研究所調査員）

北川 淑子（同上）

前田 由紀（同上）

三輪 建二（同上）

山口富喜子（同上）

インタビューに応じられた方（順不同・敬称略 地名は居住地）

- | | | | |
|---|-------|--------------|---------------|
| 1 | 石田 浩一 | 男・50歳・横浜市 | 自動車メーカー人事部管理職 |
| 2 | 増川 知代 | 女・41歳・文京区 | 大学病院看護婦 |
| 3 | 島村 恵子 | 女・40歳・江東区 | 福祉施設指導員 |
| 4 | 小原ひろみ | 女・41歳・埼玉県入間郡 | 主婦（元教員） |
| 5 | 中島 明美 | 女・22歳・千葉市 | 県庁職員 |
| 6 | 武藤ます美 | 女・26歳・豊島区 | 木材輸入会社社員 |
| 7 | 関本 章 | 男・37歳・葛飾区 | 地方公務員 |
| 8 | 大野 和子 | 女・58歳・新宿区 | 主婦（中華料理店手伝い） |
| 9 | 高柳 瑞枝 | 女・46歳・新宿区 | 薬剤師 |

10	小島 清子	女・41歳・横浜市	住宅設計会社社員
11	大鹿 悠子	女・39歳・横浜市	主婦
12	富岡沙記子	女・55歳・千代田区	主婦
13	小田 絹子	女・56歳・新宿区	主婦
14	藤木 孝子	女・36歳・中野区	保母
15	浅川 敏子	女・39歳・三鷹市	主婦
16	橋本 光子	女・44歳・大田区	主婦
17	佐原 直子	女・26歳・鎌倉市	中学校非常勤講師
18	川村 信吉	男・38歳・三鷹市	印刷業自営
19	横井 照子	女・45歳・国分寺市	主婦（会計事務所手伝い）
20	平坪 昌男	男・28歳・府中市	土木建設業自営
21	鈴木 玲子	女・24歳・東久留米市	地方公務員（ケース・ワーカー）
22	浜川 嘉雄	男・68歳・大田区	無職（元自動車販売会社勤務）
23	成田 俊子	女・54歳・大田区	主婦
24	山田 吉晴	男・64歳・国分寺市	保育園経営
25	長内みち子	女・56歳・世田谷区	主婦
26	亀井 謙三	男・72歳・横浜市	無職（元日銀勤務）
27	藤田 操	男・70歳・鎌倉市	無職（元鉱山会社勤務）
28	高橋 直人	男・35歳・豊島区	不動産会社社員
29	浅田 博史	男・57歳・鎌ヶ谷市	金属塗装会社社員
30	坂井 蔵重	男・75歳・新宿区	会計事務所経営
31	杉村 伴子	女・60歳・千代田区	主婦（元教員）
32	若林 利生	男・46歳・千葉市	大学図書館職員

■編著者紹介

倉内 史郎
くらうち・しろう

1928年生 東京大学文学部卒

現在 東洋大学教授

日本産業教育学会理事(現)、日本社会教育学会会長(前)
著書 『明治末期社会教育観の研究』『職業教育』『日本博物館沿革要覧』『社会教育の理論』他

鈴木 眞理
すずき・まこと

1951年生 東京大学大学院教育学研究科(博)中退

岡山大学講師を経て、現在、東京大学助教授

著書 『新社会教育』 論文「生涯学習を支える団体活動」(『生涯学習と社会教育の革新』所収)他

西村美東士
にしむら・みとし

1953年生 東京大学教育学部卒

国立教育会館社会教育研修所専門職員を経て、現在、昭和音楽大学短期大学部助教授

著書 『生涯学習か・く・ろ・ん——主体・情報・迷路を遊ぶ——』
『こ・こ・ろ生涯学習——いばりたい人、いりません——』他

藤岡 英雄
ふじおか・ひでお

1934年生 東京大学教育学部卒

NHK放送文化調査研究所主任研究員を経て、現在、徳島大学教授
著書 『日本人の学習』『公民館活性化への途』『社会教育計画』他

野間教育研究所紀要 第37集

生涯学習の生態学 ——成人学習の個別化状況を探る——

頒布価 6,500円

1993年3月31日発行

編著者 倉内 史郎 鈴木 眞理

西村美東士 藤岡 英雄

発行者 山本 康雄

発行所 財団法人 野間教育研究所

東京都文京区音羽 2-12-21

電話東京 (03) 5395-3679 〒112-01

製作 株式会社 周

印刷所 共同印刷株式会社

頒布価 6,500円